國學院大學学術情報リポジトリ

usage of “mairu, moudu, makadu, makaru" before a adverbial form

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 呉, 寧真
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000961

動詞に前接する「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」

呉　　寧真

キーワード：複合動詞　敬語　通常語形　謙譲語　源氏物語

１、はじめに

中古和文の「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」は、移動の意味を表す客体敬語である（森野1971）。例えば『日本国語大辞典　第二版』には、次のような記述がある。

「まいる」の項目：〔一〕「行く」の謙譲語で、行く先方を敬う。卑所から貴所へ、下位者が上位者のもとへ行くことを意味する。⇔罷出（まかず）。

「もうでる」の項目：(1)貴所・貴人のもとへ出向く。参上する。後世、貴所、貴人のもとへでなくても、出向く意の謙譲表現に用いた。

また、中世からは、「〔一〕の「行く先」を敬う性質が失せ、丁重・荘重にいうのに用いられるようになったもの。多く、対話敬語として用いる」（「まいる」の項目）との指摘がある。他にも、例えば「まかる」には、動詞に前接する場合、動作を表す働きがなく、また、後接動詞によって働きが異なることも指摘されている（大久保2003b）。

中古和文の「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」は、単独の場合、移動の意味を表す。動詞と複合する場合も、移動を表す働きが見えるが、以下の例のように、通常語形が何かわかりにくい場合もある(注1)。

(1)〔源氏→僧都〕「山水に心とまりはべりぬれど、内裏よりおぼつかながらせたまへるもかしこければなむ。いまこの花のをり過ぐさず**参り**来む。……」とのたまふ御もてなし、　〈若紫1-220〉

(2)〔源氏→玉鬘〕「(私ガ) 少将、侍従など率て**まうで**来たり。……」
など、ささめきつつ聞こえたまふ。 〈常夏3-227〉

(1) (2) に移動の意味はあるが、後項の動詞「来」は移動の意味を表せるため、前項の「まゐる」「まうづ」に移動の意味があるかどうかが判然としない。また、移動の意味があると考える場合、その通常語形は「来来」や「行き来」(注2) になるが、このような形は考えにくいため、(1) (2) は複合動詞の敬語形ではないようである。では、(1) (2) の「まゐり—」「まうで—」はどのような働きがあるのか、また、他の「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」が動詞に前接する場合も (1) (2) と同じ働きをするのか、あるいは複合動詞(注3) なのかどうかの考察が必要である。

そこで本稿では、動詞に前接する「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」は複合動詞の前項なのかどうか、また、どの語の敬語であるのかについて明らかにすることを目的とする。

2、調査方法

本稿はまず、「まゐる」(注4)「まうづ」「まかづ」「まかる」に後接する動詞から、移動の意味がない動詞の例を収集し、前項に移動の意味があるかどうかを確認する。ない場合、どのような役割があるのかを考える。(3節)

次に、後項の動詞に移動の意味がある場合、その動詞が「来」「行く」、移動の意味の「おはす・おはします」と複合するかどうかを確認することで、「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」の意味用法を探っていく。(4節)

本稿の調査資料は源氏物語とした。調査には「日本語歴史コーパス」(国立国語研究所 (2020)) (以下「CHJ」)(注5) を利用し、表記は一部改めた。引用文中の〔 〕は話し手と聞き手を、( ) は補足説明を、〈 〉は出典の巻名、小学館『新編日本古典文学全集』の巻数-頁数を示す。

3、後項の動詞に移動の意味がない場合

後項になる移動の意味がない動詞は以下の通りである。複数例あるものはカッコで示す。

まゐる	集ふ（17）、仕る（12）、集まる（10）、馴る（9）、合ふ（7）、違ふ（2）、承る、込む、さ迷ふ、さぶらふ、初む、付く
まうづ	合ふ、込む
まかづ	散る（8）
まかる	絶ゆ（2）、あかる、憧る、当たる、失す、泊まる、馴る、宿る

合わせて82例中、前項の「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」に移動の意味があると確認できたのは81例、確認できなかった例は「まかり―」に１例（例（10））である。移動の意味がある例から検討する。

３・１、「まゐり―」

(3) 上（＝桐壺帝）にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮（＝藤壺ノ母后）にも親しう**参り**馴れたりければ、（藤壺ノ）いはけなくおはしましし時より見たてまつり、〈桐壺1-41〉

(4) 内裏より召しありて（僧都ハ）常にさぶらはせたまふ。このごろは、なほもとのごとく**参りさぶらは**るべきよし大臣（＝源氏）もすすめのたまへば、〈薄雲2-449〉

(3) は、「母后に伺うことに慣れている」の意味で、(4) は、「参内して近侍する」の意味であり、移動の意味が認められる。また、(3) は客体である母后へ、(4) は客体である帝への敬意が観察されるため、客体敬語であると考えられる。ただし、(4) の「さぶらふ」も同じ動作客体への敬意があるため、「参りさぶらふ」は前項も後項も客体敬語である両項敬語形の形である。同じく「奉仕する」の意味を持つ「仕る」、「聞く」の意味の客体敬語「承る」も同じ現象が見られる。この３種類の動詞は、「参り馴る」のように、後項が前項を修飾するのではなく、「移動してから奉仕する」「移動してから話を聞く」のように、連続する二つの動作である特徴がある。このような形については、「参り、さぶらふ」のように、２語に分ける可能性がある。

３・２、「まうで―」

(5) こまかなることは、いかでかは言ひ聞かせむ、ただ、〔少将の尼→浮舟〕「知りきこえたまふべき人（＝尼君）の、年ごろはうとうとしきやうにて過ぐしたまひしを、初瀬に**詣で**あひたまひて、尋ねきこえたまへる」とぞ言ふ。〈手習6-329〉

(6) すこし足馴れたる人は、疾く御堂に着きにけり。この君をもてわづらひきこえつつ、初夜行ふほどにぞ上りたまへる。いと騒しく、人**詣で**こみてののしる。〈玉鬘3-110〉

(5)(6) はともに参詣するという移動の意味があり、また、客体である神仏への敬意が観察されるため、客体敬語であると考えられる。

３・３、「まかで―」

(7)（匂宮ハ）この君召し放ちて語らひたまへば、人々は近くも参らず、**まかで**散りなどして、しめやかになりぬれば、〈紅梅5-50〉

(7) は匂宮が大夫の君をそばに呼び寄せて、他の殿上人はそれぞれ退出する場面である。「散る」は「散らばる」の意味で、移動の意味は前項にあると考えるが、「散る」にも移動の意味がある可能性もある。その場合、源氏物語に「行き散る」の例が４例（須磨2-171、蓬生2-327、総角5-287、蜻蛉6-261）あり、「帰り散る」の例が１例（〈玉鬘3-102〉）あることから、「まかづ」の通常語形は移動の動詞と考えられる。また、(7) は客体である匂宮への敬意が観察されるため、客体敬語であると考えられる。

３・４、「まかり―」

(8)〔左馬頭→源氏など〕「……など言ひしろひはべりしかど、……、臨時の祭の調楽に夜更けていみじう霙降る夜、（同僚ノ）これかれ（宮中ヲ）**まかり**あかるる所にて思ひめぐらせば、なほ家路と思はむ方はまたなかりけり。……」とて、〈帚木1-74〉

(9)〔左馬頭→源氏など〕「……ただ時々うち語らふ宮仕人などの、あくまでさればみすきたるは、さても見る限りはをかしくもありぬべ

し、時々にても、さる所にて、忘れぬよすがと思ひたまへむには、頼もしげなく、さし過ぐいたりと心おかれて、その夜のことにことつけてこそ**まかり**絶えにしか。……」と戒む。　〈帚木1-80〉

(8)(9)は同じ場面の発話であり、話し手と聞き手も同じである。(8)は宮中から「退出して別れる」の意味で、通常語形は「行きあかる」と考えられる。(9)は通わなくなった女性について話す場面であり、通常語形は「行き絶ゆ」と考えられる。

ただし、「まかる」は基本的に会話文に用いられ、対者敬語の性格が強いと指摘される(森野1971、田辺1973、大久保2003a)通り、客体敬語ではない例が多い。(8)の敬意の対象は帝であると考えられるが、(9)の発話者は、動作客体の女性に敬語を用いない。また、同じ文中で「はべり」、下二段の「たまふ」と共起するため、客体敬語ではなく、聞き手の源氏たちへの対者敬語であると考えられる。

以上のように、後項になる動詞に移動の意味がない場合、前項にはほとんど移動の意味が確認できた。以下は、唯一移動の意味がない例である。

(10)〔僧都→冷泉帝〕「いと奏しがたく、かへりては罪にもや**まかり**当たらむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終はりはべりなば、何の益かははべらむ。……」とばかり奏しさして、　〈薄雲2-449〉

(10)は僧都が冷泉帝に向かって、帝の実の父親が源氏であることを奏上し、話すと天罰が当たるが、話さなくても罪が深いと述べる場面である。移動して天罰が当たることではないため、ここの「まかる」に移動の意味がなく、前述したように、聞き手の帝への対者敬語であると考えられる。

従って、「まゐる」「まうづ」「まかづ」が前項になり、後項になる動詞に移動の意味がない場合、前項は移動の意味がある客体敬語であり、その通常語形は移動の動詞「来」「行く」であると考えられる。

「まかる」だけは、基本的には移動の意味があるが、ない例も1例ある。また、すべての例が会話文であり、対者敬語「はべり」「たまふ(下二段)」と

多く共起するため、対者敬語と考えられる例が多い。従って「まかり―」については、①移動の意味がある客体敬語、②移動の意味がある対者敬語、③移動の意味がない対者敬語、が観察できるのである。

４、後項の動詞に移動の意味がある場合

「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」に後接する動詞に、移動の意味がある場合、複合動詞全体の移動の意味は、どの動詞が表すのかが判別できない。本稿では、「まゐる・まうづ・まかづ・まかる―」の通常語形を探るために、「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」に後接する動詞と、その動詞が複合する形式を調査する。その結果をまとめたのが次の【表１】【表２】【表３】である。表の横列は前項であり、縦列は後項である。また、「まかづ」の８例は、３節で述べた通り、すべて「まかで散る」の例であるため、ここでは再掲しない。

【表１】「まゐり―」

前項 後項	まゐり―	来―	行く―	おはし― おはしまし―
帰る	1		3	
通ふ	7	2	6	5
着く	2	1	6	22
訪ふ	2	1		
寄る	11			1
来	42			
まかづ	1			

【表２】「まうで―」

前項 後項	まうで―	来―	行く―	おはし― おはしまし―
通ふ	1	2	6	5
着く	1	1	6	22
訪ふ	1	1		
歩く	1			
来	16			

【表３】「まかり―」

前項 後項	まかり―	来―	行く―	おはし― おはしまし―
帰る	1		3	
通ふ	3	2	6	5
過ぐ	2		2	2
着く	1	1	6	22
離る	1		9	1
向かふ	1	1		
寄る	1			1
歩く	4			
出づ	6			
入る	3			
移る	1			
下りる	1			
下る	2			
逃げる	1			
上る	5			
渡る	1			

全用例を見渡すと、「来―」「行き―」「おはし・おはしまし―」の例がみられた。しかし、「来」「行く」「おはす・おはします」が前接する例がない動詞もかなりある。次項から前接例のある例からみていく。

４・１、「来」「行く」「おはす・おはします」の前接例がある場合

４・１・１、「まゐり―」「まうでー」

「まゐる」に後接する動詞は５語、「まうづ」は３語ある。

(11) いまは限りと侮りはてて、さまざまに競ひ散りあかれし上下の人々、我も我も参らむと争ひ出づる人もあり。……、ことなることなきなま受領などやうの家にある人は、ならはずはしたなき心地するもありて、うちつけの心みえに**参り**帰る。〈蓬生2-354〉

(12) 侍従は、斎院に**参り**通ふ若人にて、このころはなかりけり。〈末摘花1-291〉

(13) 惟光、日ごろありて参れり。「わづらひはべる人、なほ弱げにはべれば、とかく見たまひあつかひてなむ」など聞こえて、近く**参り**寄りて聞こゆ。〈夕顔1-143〉

(11) は源氏の庇護を得た末摘花のもとに、離散した召使などが戻る場面であり、通常語形は「行き帰る」である可能性がある。(12) は末摘花に仕える女房侍従について述べる場面であり、侍従は斎宮のところにも出入りしている。通常語形は「行き通ふ」と考えられる。(13) は惟光が源氏に近寄って報告する場面である。通常語形は「来寄る」と考えられる。

(14) 侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれはてぬ者にてさぶらひつれど、通ひ参りし斎院亡せたまひなどして、いとたへがたく心細きに、この姫君の母北の方のはらから、世におちぶれて受領の北の方になりたまへるありけり、むすめどもかしづきて、よろしき若人どもも、むげに知らぬ所よりは、親どもも**まうで**通ひしをと思ひて、時々行き通ふ。〈蓬生2-332〉

(15) 命婦、かしこに**まで**着きて、門引き入るるよりけはひあはれなり。〈桐壺1-27〉

(16) 弁の君、はた、思ふ心なきにしもあらで気色ばみけるに、事の外なる御もてなしなりけるには、強ひてえ**まで**とぶらひたまはずなりにたり。〈夕霧4-397〉

(14) は、末摘花に仕える女房侍従が、自分の親も出入りしていたところの方がいいと思う場面である。敬語を用いない「行き通ふ」とも共起している。(15) は命婦が更衣の屋敷に到着する場面であり、通常語形は「来着く」と考えられる。(16) は、柏木の弟弁の君は求婚が断れたため、訪ねることができなくなる場面であり、通常語形は「来訪ふ」と考えて問題なさそうである。

以上のように、「まゐる」「まうづ」に後接する動詞は、「来」「行く」の前接の例がある場合、「まゐり―」「まうで―」の通常語形は「来―」「行き―」と考えて問題なさそうである。

４・１・２、「まかり―」

「まかり―」は異なり語数が多く、後接する動詞は７語ある。また、会話文が多く、10例中１例だけ地の文である。

(17) (源氏ガ) 石山より出でたまふ御迎へに衛門佐参れり。一日**まかり過ぎ**しかしこまりなど申す。昔、(右衛門佐ガ) 童にて (源氏ガ) いと睦ましうらうたきものにしたまひしかば、〈関屋2-361〉

(18) 〔左馬頭→源氏など〕「さて、また同じころ、**まかり通ひ**し所は、人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、掻い弾く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず見聞きわたりはべりき。……」〈帚木1-77〉

(19) 御使出だし立てたまふ。〔源氏→使者〕「かならずその日違へず**まかり着け**」とのたまへば、五日に行き着きぬ。〈澪標2-294〉

(17) は右衛門佐が先日通り過ぎてしまうことについて、源氏に謝る場面である。通常語形は「行き過ぐ」と考えられる。また、地の文であり、客体敬語「参る」「申す」と共起することから、「まかり過ぐ」は客体敬語であると考えられる。(18) は左馬頭が通っていた女性について述べる場面である。通常語形は「行き通ふ」と考えられる。また、女性について敬語を使用しな

いため、聞き手の源氏たちへの敬意と考えられ、「まかり通ふ」は対者敬語であろう。(19) は源氏が明石へ使者を派遣する場面である。通常語形は「行き着く」と考えられる。また、客体敬語と考えると、発話者である源氏の自分への敬意になる。ただし、聞き手である使者への敬意とも考えにくい。大久保（2003a）で指摘された通り、敬意を表さない格式語であると考えられる。

４・２、「来」「行く」「おはす・おはします」の前接例がない場合

４・２・１、「まゐり―」「まうで―」の移動の意味が考えられる例

まず、「まゐる」「まうづ」に移動の意味が考えられる例から検討する。「まゐる」「まうづ」に１語ずつある。

(20)（藤壺ハ）年ごろ世に憚りて出で入りも難く、（春宮ニ）見たてまつりたまはぬ嘆きをいぶせく思しけるに、思すさまにて**参りまかで**たまふもいとめでたければ、〈澪標2-300〉

(21)……、（匂宮ハ）いといたう色めきたまうて、通ひたまふ忍び所多く、八の宮の姫君にも、御心ざし浅からで、いとしげう**まうで**歩きたまふ、〈紅梅5-55〉

(20)は冷泉帝の即位によって、藤壺が自由に内裏に出入りできるようになったと述べる場面であり、「参る」と「まかづ」は並列的な二つの動作として、同じく移動の意味を持つ客体敬語であり、帝への敬意である。「来行く」や「行き来」の例はないが(注6)、同じ文の「出で入る」とは近い用法であると考えられる。また、(4) と同じく、前項も後項も客体敬語である両項敬語形の形であり、「参り、まかづ」のように、２語に分ける可能性がある。(21) は、匂宮は八の宮の姫君にも執心があるため、足しげく通っていると述べている場面である。「来歩く」や「行き歩く」の例はないが、(22) のように、「通ひ歩く」のような「移動＋歩く」の例は他の作品に散見される。また、姫君への客体敬語であると考えられる。

(22) 下わたりに、品いやしからぬ人の、事もかなはぬ人をにくからず思ひて、年ごろ経るほどに、親しき人のもとへ行き通ひけるほどに、むすめを思ひかけて、みそかに通ひありきけり。

〈堤中納言物語、487〉

４・２・２、「まゐり―」「まうで―」の移動の意味が考えられない例

次に、「まゐる」「まうづ」に移動の意味が考えられない例を検討する。「まゐり・まうで＋来」の例である。

(23) 君は、何心もなく寝たまへるを、抱きおどろかしたまふに、（若紫ガ）おどろきて、宮（＝父宮）の御迎へにおはしたると寝おびれて思したり。……、〔源氏→若紫〕「いざたまへ。宮の御使にて**参り**来つるぞ」とのたまふに、〈若紫1-254〉

(24) 黄昏時のおぼおぼしきに、……、大臣（＝源氏）、姫君（＝玉鬘）を、「すこし、外出でたまへ」とて、忍びて、「少将、侍従など率て**まうで**来たり。……」など、〈常夏3-227〉

(23) は源氏が若紫に、自分は使者として来たと述べている場面である。「参り来」は「来る」の意味であり、(20) のように、「使者として入ってきた」とも解釈しにくい。会話文であるため、対者敬語である可能性もある。(24) は源氏が玉鬘を呼び出す場面であり、「参で来」は「来る」の意味である。(23) と同じく、「まうづ」は他の移動の動詞であると考えにくい。また、会話文であるため、対者敬語である可能性もある。

従って、「まゐり来」「まうで来」以外、「まゐり・まうで―」は客体敬語であり、その通常語形は移動の動詞であると考えられる。「まゐり来」「まうで来」は対者敬語の可能性があり、また、通常語形については不明である。

４・２・３、「まかり―」

「まかり―」は異なり語数が多く、後接する動詞は９語ある。また、会話文が多く、25例中１例だけ地の文である。

(25) 主の院も、あはれに涙ぐましく、思し出でらるることども多かり。夜に入りて、楽人ども**まかり**出づ。〈若菜上4-95〉

(25) は楽人たちが退出する場面であり、源氏物語には「行き出づ」の例がないが、(26) のように、他の作品には「行く」が前接する例がある。また、

「帰り出づ」〈須磨2-182、宿木5-379、蜻蛉6-209〉のような移動動詞の可能性も考えられる。

（26）遥ニ山ヲ隔テヽ遠ク去テ、人郷ノ有ケルニ行出ニケレバ、

〈今昔物語集、巻第二十九・第九、319〉

調査範囲を広げると、「行き逃げる」〈宇治拾遺物語、巻第十二・十九、384〉、「行き上る」〈今昔物語集、巻第十一・第三十五、146〉、「行き渡る」〈万葉集3335、3339、4103、4125番歌〉の例があり、以上の「まかり―」の通常語形は「行き―」と考えて特に問題なさそうである。ただし、会話文における例は対者敬語の性格が強く、客体敬語ではないと考えられる。

（27）中納言の君（＝夕霧）、〔→朱雀院〕「過ぎはべりにけむ方は、ともかくも思うたまへ分きがたくはべり。年**まかり**入りはべりて、朝廷にも仕うまつりはべる間、世の中のことを見たまへまかり歩くほどには、……」など奏したまふ。〈若菜上4-23〉

（28）紀伊守に仰せ言賜へば、うけたまはりながら、退きて、〔→源氏〕「伊予守朝臣の家につつしむことはべりて、女房なむ**まかり**移れるころにて、狭き所にはべれば、なめげなることやはべらむ」と下に嘆くを聞きたまひて、〈帚木1-92〉

（29）〔僧都→薫〕「**まかり**降りむこと、今日明日は障りはべる。月たちてのほどに、御消息を申させはべらむ」と申したまふ。

〈夢浮橋6-380〉

（30）大和守も、〔→夕霧〕「さらにうけたまはらじ。心細く悲しき御ありさまを見たてまつり嘆き、このほどの宮仕は堪ふるに従ひて仕うまつりぬ。今は、国のこともはべり、**まかり**下りぬべし。……」と言ひつづけて、〈夕霧4-462〉

（27）は夕霧が、成人して朝廷に仕えるから色々見てきたと述べている場面であり、「年まかり入る」は「年入り」の意味であり、移動の意味がない。また、その他の２例「まかり入る」は〈藤裏葉3-440、若菜上4-115〉、「入る」の意味はあるが、「まかる」に移動の意味があるかどうかが判別つかない。（28）は紀伊守が源氏に空蝉などの状況について伝える場面であり、（29）は

僧都が薫に、今日明日に下山できないと伝える場面であり、(30) は大和守が夕霧に、任国の用事があるため、帰らなければいけないと伝える場面である。以上の例は、後項の動詞に意味はあるが、前項の「まかる」に移動の意味があるかどうかが不明である。また、地の文の (25) と異なり、「貴人のそばから退出する」の方向性は特にみられない。「まかり下る」だけは必ず都から地方に移動するが、それは「下る」の意味でもあるため、「まかる」の意味であるかどうかが疑わしい。

従って、地の文の「まかり―」は客体敬語であるが、会話文中の「まかり―」は客体敬語ではなく、対者敬語であると考えられる。また、その通常語形について、「行く」の前接の例がある場合、移動の動詞の敬語形と考えられる。ない場合、後項と意味の分別がつかないため、不明である。

5、「まゐり来」「まうで来」「まかり―」の通常語形

では、「まゐり来」「まうで来」と会話文中の「まかり―」の通常語形は何であろうか。それらの共通点は、地の文で用いないことである。

まず、「まゐり来」「まうで来」について、検索範囲を CHJ の平安時代編全部まで広げても、「まゐり来」は79例中地の文の例がない(注7)。「まうで来」は83例中、竹取物語３例だけ地の文の例がある。

(31) かの唐船来けり。小野のふさもり**まうで**来て、まう上るといふことを聞きて、歩み疾うする馬をもちて走らせ迎へさせたまふ時に、馬に乗りて、筑紫より、ただ七日に**まうで**来たる。〈竹取物語38〉

(32) 中納言のたまふやう、「いとよきことなり」とて、麻柱をこほち、人みな帰り**まうで**来ぬ。〈竹取物語52〉

(31) は唐土から日本へ、そして地方から都への移動、(32) は家来の人々が中納言邸へ帰ることであり、明らかな身分差がみられる。

さらにさかのぼると、万葉集には「まゐり来」２例、「まゐで来」２例あり、続日本紀宣命には「まゐり来」１例、「まゐで来」１例ある。その中の５例は朝廷や内裏に参上するため、(31) と使い方が同じである。万葉集の１例だけは、朝廷への敬意ではない。

(33) 降る雪を　腰になづみて　**参り**来し【参来之】　験もあるか　年の初めに　〈万葉集、4230番歌〉

(33) は家持が内蔵縄麻呂の家に、宴会を参加するときの作歌である。「参り来」は家持から内蔵への敬意であり、地の文より、会話文に近い使い方である。

【表１】【表２】からみると、「まゐり来」42例、「まうで来」16例は他の例と比べて、圧倒的に多く、慣用表現であると考えられる。万葉集から対者敬語と思われる例があることから、「まゐり来」「まうで来」は一語化しているのであろう。

ここでは、会話文中の「まゐり来」「まうで来」の前項は、内容的な意味を持たず、「聞き手への敬意」と「方向性」の機能だけ持つと考える。つまり、「まゐり来」「まうで来」の通常語形は「来」である。もし前項に移動の意味があれば、たとえ「来来」が一般的な形ではないため、使われないとしても、「まし来」「いまし来」「おはし来」「おはしまし来」のような形は許容されそうであるが例がない。「ます・います・おはす・おはします」は前項になる場合、機能語としての使い方を持たないからである。

中世になると、「まゐる」は対者敬語になったとの指摘があるが、上代からは、「まゐり来」「まうで来」が先にこのような傾向を見せたように思える。

では、なぜ「来」だけであろうか。「来」は補助動詞が後接する例がなく、敬語形にする場合、敬語独立動詞に変える傾向がある動詞である。「たまふ」「たてまつる」「きこゆ」の後接例がない以外、「はべり」の後接例もない。敬意を表す機能語を付けたい場合、「はべり」などの代わりに、「まゐり・まうで―」を用いたのではなかろうか。

また、「まかり来」「まゐり行く」「まうで行く」の例がないことから、客体敬語として使われても、方向性はまだ意識されている可能性がある。

次に、「まかり―」について、３、４節から、以下の４タイプに分類できる。

【表４】「まかり―」のタイプ

タイプ	移動の意味	前項の通常語形	文体	種類	範例
Ⅰ	○	移動の動詞	地の文	客体敬語	(17)
Ⅱ	○	移動の動詞か	会話・手紙	対者敬語	(9)
Ⅲ	○	移動の動詞	会話・手紙	格式語	(19)
Ⅳ	×	想定できない	会話・手紙	対者敬語	(10)

上代では、客体敬語（タイプⅠ）として使われる「まかる」であるが、対者敬語（タイプⅡ）に移行したと考えられる。Ⅱは、後項に移動の意味がある場合、前項に移動の意味があるかどうかが判然としない場合が多いが、移動の方向性が規定されることから、「まかる」の機能性はあると考えられる。また、会話文中であるが、動作客体の身分が高い場合、客体敬語とも解釈できそうな例がある。そしてⅡの用法から、敬意のないタイプⅢと、移動の意味がないタイプⅣが生まれる。Ⅳは中世で主な用法になり、ⅠⅡⅢは滅びた。

４節の（28）（29）（30）は、後項に移動の意味があり、会話文であり、対者敬語であるが、前項の通常語形は移動動詞と想定できないため、【表４】の枠組みに入らない。この３例は、ⅡからⅣへの変化の途中の例と考えられる。

以上のように、「まゐり来」「まうで来」の通常語形は「来」である。また、４節から、通常語形が移動動詞と想定できない「まかり―」の通常語形は、その後項にある動詞である。

６、おわりに

本稿では、動詞に前接する「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」が複合動詞の前項かどうか、また、どの語の敬語形なのかについて、通常語形を調査することを通して探り、以下の結論を得た。

１、「まゐる」「まうづ」「まかづ」が前項になり、後項になる動詞に移動の意味がない場合、移動の意味がある客体敬語であり、その通常語形は移動の動詞であると考えられる。

２、「まゐり来」「まうで来」を除き、「まゐる」「まうづ」が前項になり、

後項になる動詞に移動の意味がある場合も、移動の意味がある客体敬語であり、その通常語形は移動の動詞であると考えられる。

3、「まゐり来」「まうで来」の通常語形は「来」であり、会話文で用いる場合、対者敬語であると考えられる。

4、「まかる」が前項になり、地の文で用いる場合、移動の意味がある客体敬語であり、その通常語形は移動の動詞であると考えられる（Ⅰ）。会話文で用いる場合、移動の意味がある客体敬語（Ⅱ）、移動の意味がある格式語（Ⅲ）、移動の意味がない対者敬語（Ⅳ）、また、通常語形が後項である対者敬語（ⅡとⅣの間にあるタイプ）がみられる。

注

(1) 通常語形とは、敬意のある動詞の形から敬意を除く形である。例えば、「おぼしめす」も「思ひたまふ」も、通常語形は「思ふ」である。

(2) 源氏物語には「行き来」の例がない。検索範囲を広げると、万葉集に例はあるが、「来る」の意味ではなく、「往来する」の意味であるので、(1)(2) の通常語形であると思えない。

(3)「動詞+たまふ」のような補助動詞との連接以外、「動詞連用形+動詞」の形を「複合動詞」と呼ぶが、現代語の複合動詞と等価であると思わない。また、前項と後項との判別ができないため、三項以上の動詞連接は扱わない。

(4)「まゐる」145例中、「差し上げる」の意味の例は6例である。この6例は扱わない。

(5) 検索条件式は以下の通りである。

まゐる：「キー: 品詞 LIKE ″動詞 %″

AND 前方共起: (語彙素読み=″マイル″ AND 活用形 LIKE ″連用形 %″) ON 1 WORDS FROM キー

IN subcorpusName=″平安-仮名文学″ AND 作品名=″源氏物語″

WITH OPTIONS tglKugiri=″″ AND tglBunKugiri=″#″ AND limitToMainText=″1″ AND limitToSelfSentence=″1″ AND tglWords=″50″ AND unit=″1″ AND encoding=″UTF-16LE″ AND endOfLine=″CRLF″」

まうづ：「キー: 品詞 LIKE ″動詞 %″

AND 前方共起: (語彙素読み=″モウデル″ AND 活用形 LIKE ″連用形 %″) ON 1 WORDS FROM キー

IN subcorpusName=″平安-仮名文学″ AND 作品名=″源氏物語″

WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"」

まかづ:「キー: 品詞 LIKE "動詞 %"

AND 前方共起: (語彙素読み="マカデル" AND 活用形 LIKE "連用形 %") ON 1 WORDS FROM キー

IN subcorpusName="平安-仮名文学" AND 作品名="源氏物語"

WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"」

まかる:「キー: 品詞 LIKE "動詞 %"

AND 前方共起: (語彙素読み="マカル" AND 活用形 LIKE "連用形 %") ON 1 WORDS FROM キー

IN subcorpusName="平安-仮名文学" AND 作品名="源氏物語"

WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="50" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"」

また、本稿で用いた用例は「https://researchmap.jp/gons7808/資料公開」で公開している。サンプル ID と開始位置をコピーし、CHJ の「位置検索」に張り付けると、用例の確認、データの再利用などができる。

(6) 源氏物語には「行き来」の例がないが、以下のように、万葉集 2 例〈55、1810〉、十訓抄 1 例〈第七・二十四、322〉がみられる。

あさもよし　紀人ともしも　真土山　行き来と見らむ　紀人ともしも

〈万葉集、55番歌〉

(7) 落窪物語に地の文 1 例「参りこ｜む」が検索されるが、「参り込む」の誤解析であると考え、例として扱わない。

テキスト、索引

国立国語研究所（2020）『日本語歴史コーパス』バージョン2020.3 https://chunagon.ninjal.ac.jp/

阿部秋生ほか校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集　源氏物語』小学館

参考文献

大久保一男（2003a）「「中古敬語法小考」について―付、「まかる」の一用法―」『国語研究』66

大久保一男（2003b）「覚一本平家物語の「まかる」」『國學院雑誌』104-7

田辺正男（1973）「「まゐる」「まかづ」などについて」『今泉博士古稀記念国語学論叢』桜楓社

森野宗明（1971）「第三章　古代の敬語Ⅱ」辻村敏樹編『講座国語史５　敬語史』大修館書店

付記：本研究はJSPS科研費JP19K23064の助成を受けたものです。